中学校 質問紙

今年度の主な特徴

自己肯定感を高めている生徒

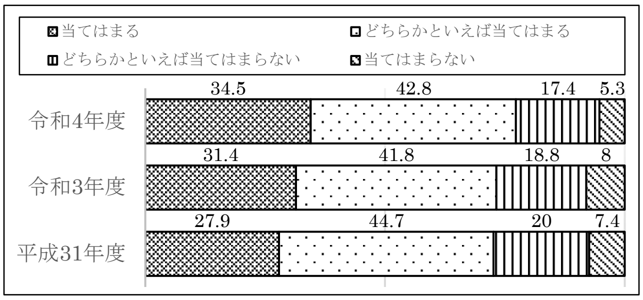

図1「自分には、よいところがある」

図1は「自分には、よいところがある」という質問についての経年変化です。「当てはまる」と回答した割合が 3 年前と比較しておよそ 7 ポイント増えており、自分のよさに気づき、自身を肯定的にとらえている生徒が増えてきていることがわかります。これは、学校における探究的な学びの継続など生徒が自分で決めたことをやり遂げた経験に加え、**図2**「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の全国との比較でもわかるように、コロナ禍で行事の中止・縮小が増えたものの、松本版コミュニティスクールなどを中心とした地域とのかかわりの中で、生徒に寄せる保護者や地域のあたたかな支えに触れていることが、自己肯定感を高めることにつながっていると考えられます。

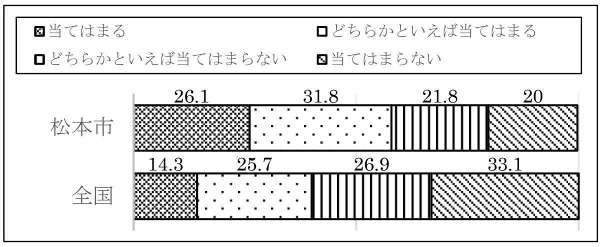

図 2「今住んでいる地域の行事に参加していますか」

互いの意見を生かし、話し合いで解決方法を決められる生徒

図3は「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」の質問についての経年変化です。「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合は、6 年前と比較しおよそ 18 ポイント高くなっています。これは、新学習指導要領で求められる生徒の疑問や問いを授業に生かした「主体的・対話的で深い学び」の視点による学習の積み重ねが、話し合う活動のよさを味わうことにもつながっているものと考えられます。

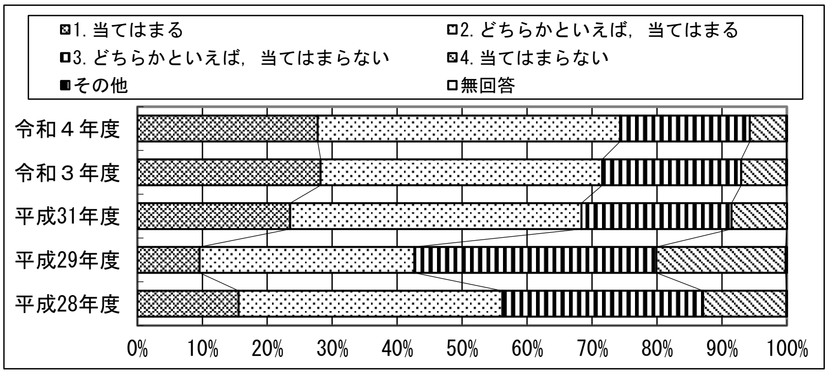

図３ あなたの学級では、学校生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか

◇学力状況と生活・学習実態との相関関係

PC・タブレットなどの ICT 機器の使用と正答率

表1は、本年度から新設された質問「授業中に自分で調べる場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っているか」への回答と平均正答率です。国語・数学・理科の全ての教科で、使用頻度が「ほぼ毎日」「週3回以上」の生徒より「月1回以上」「月1回未満」の生徒の方がやや平均正答率がやや高い傾向にあり、単純にICT機器の使用頻度が高ければ、学力が高いとは言えないということが分かります。

選択肢		生徒数の割合(%)	平均正答率(%)		
			国語	数学	理科
1	ほぼ毎日	5.2	65.0	45.0	48.3
2	週３回以上	20.0	67.5	52.0	50.0
3	週１回以上	39.3	70.5	52.2	50.4
4	月１回以上	25.4	73.1	56.2	53.2
5	月１回未満	10.1	68.9	50.8	52.0

<表1>学校で、授業中に自分で調べる場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか。（インターネット検索など）

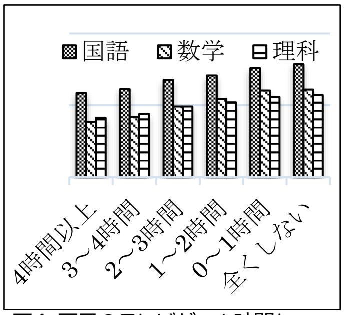

図4 平日のテレビゲーム時間と平均正答率

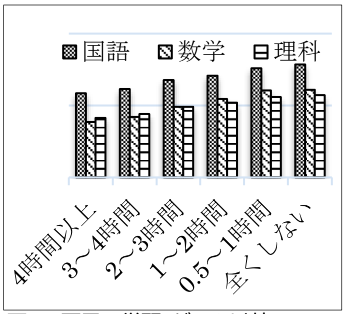

図５ 平日の学習・ゲーム以外のSNS・動画視聴時間と平均正答率

一方で、テレビゲーム（**図4**）、SNSや動画視聴（**図5**）を1日何時間するかという質問と正答率との相関では、「全くしない」「1時間より少ない」と回答した生徒は、いずれの教科でも平均正答率が高く、「4時間以上」にくらべて最大で20ポイント以上高い教科もあり、学習以外での使用時間が長くなるほど、平均正答率は下がっていく傾向が顕著に見られます。

また、「普段、スマートフォンやコンピュータなどのICT機器を1日何時間、勉強のために使っていますか」という質問でも、使用時間が長くなるほど、平均正答率は下がっていく傾向も見られ（**図6**）、ICT機器の家庭学習での利用については、更に効果的で正しい使用方法を習得していくことが大切と思われます。

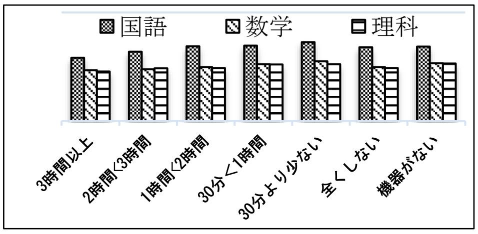

図６ 普段、スマートフォンやコンピュータなどのICT機器を1日何時間、勉強のために使っていますか

理科の授業や問題への取り組みと正答率

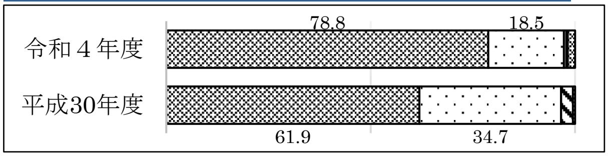

図７ 今回の理科の問題では、解答を文章などで書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか

4年ぶりに実施した理科の学力調査では、「解答を文章などで書く問題についてどのように解答したか」（**図7**）という質問に、8割近くの生徒が「全ての書く問題で解答を書こうと努力した」と回答し、割合が大きく上昇しています。

また、「理科の授業で、観察や実験の結果をもとに考察していますか」（**図8**）の質問では、「当てはまる」と回答した生徒は、全国より６ポイント高く、「当てはまらない」と回答した生徒と平均正答率に最大で18ポイントの差がありました。各校の理科授業において、見通しをもって観察・実験・考察を行うという科学的事象を探究する過程を大事にしてきていることが、自ら課題をもち粘り強く取り組む力の育成につながり、正答率にも反映されていると推測できます。

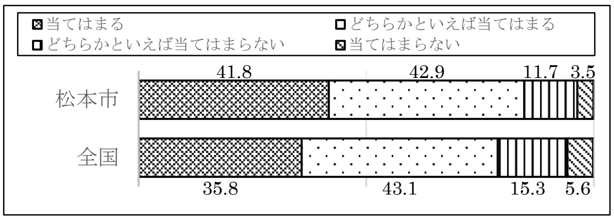

図８ 観察や実験の結果をもとに考察していますか

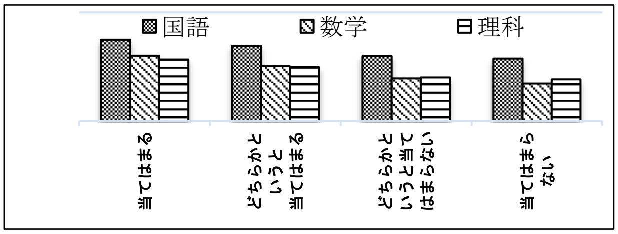

図９ 図８について生徒が回答した選択肢別の平均正答率

総　括

「自分にはよいところがある」と答える生徒の割合は、年々増加しており、これまでで最も高い割合となっています。「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の質問に肯定的に答えている生徒も多く、教師が生徒の良い面を適切にとらえ、タイムリーにプラスの評価を返したり、引き続き全国と比べて高い割合を示している地域とのつながりの中で、生徒が活躍する機会が多かったりすることもその要因として考えられ、松本市の教育環境の豊かさが伺えます。

一方、昨年度から本格的に導入が始まったICTの活用では、授業中「自分で調べる学習」や「意見を交換する場面」での活用が全国より10ポイントほど下回ったり、生徒と教師の活用意識に乖離が見られたりしています。一概にICT機器の使用頻度が高ければ、学力が高いとは言えないものの、個別最適な学習のほか「調べ学習」や「まとめ」「発表場面」などでの有効な活用が一層期待されます。また、家庭学習での活用も求められている一方で、家庭における生徒のICT機器との向き合い方については心配も多く、今後の大きな課題と言えます。